

リボーンの特典を得た男が間違っって白兎に憑依した!?

□□さん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは神の部下のミスで死んだREBORN大好き男がベル・クラネルに憑依をしてダンジョンで大暴れする物語です。

目次

プロローグ	1
冒険者登録、ヘステイア・ファミリア入団	5
真実の告白とステイタス登録	10
ミノタウロスと剣姫との出会い	14
狼人と有象無象の処刑	17
銀髪の給仕と下層への進行	22
【ロキ・ファミリア】	25
調整と豊饒の女主人	29
飲み比べと帰路	32
【邂逅】	37
顔合わせと神会	43

プロローグ

確か俺は自分の部屋でREBORN全巻とアニメ全話見終わって寝たはずだった、なのにこんな真っ白い空間にいるのだろうか？

そう考え込んでいると、後ろの方から声をかけられた。

「申し訳ごいませんでしたああああああああつ!!」

俺にそう言つて土下座してくるのは金髪青目のイケメンで、その第一声が謝罪という奇妙な会話始まりだった。

つていうか、イケメンが土下座している姿つて見ていて最高にイイネ!

そう思っていると、男が顔を上げてこう言ってくる。

「・・・君、落ち着いて聞いてほしい。君はもう死んでしまっているんだ。」

「・・・Why?」

イケメンの活きなり俺死亡宣言に啞然としまった。

「えっ、それつてどゆこと?俺つてば召されちやつた訳!?!」

俺は気が動転してしまい、訳の分からないことを口走つてしまっている。

すると、イケメンがこう言ってくる。

「落ち着いて下さい、君が死んでしまった事によつて都合が悪いのは我々も同じなのです。」

イケメンの言葉を聞いて俺は疑問を投げかける。

「我々もつてどうい事だよ?」

俺がそう言うと、イケメンはこう言つて来る。

「実は本来あなたは死ぬ存在ではないのです。所が、神の部下である天使があなたの人生を示す書類をシュレッダーに掛けて細かくしてしまつたのでそれで死にました。」

「ちよつと待てコラ、それじゃ何か俺はシュレッダーで死んだつてのか!!」

俺は男の話を聞いてブチ切れ、胸ぐらを掴みながらそう言つた。

「そうなんですけど、安心してください。」

男は胸ぐらを掴まれたまま、俺にそう言って来るが安心などできない。

「安心なんて出来る訳ねえだろうがよ、ふぎけんじゃねえぞ!!」

俺は頭に血を上らせながらそう言った。

「怒りはごもつとも。ですから、あなたには転生をしてもらおうと思います。」

転生、その言葉を聞いた俺は掴んでいた胸ぐらを離した。

「転生ってどういう事だよ。」

転生と言う言葉を聞いて少し冷静になった俺は落ち着いた口調でそう言うと、男はこう言って来る。

「簡単に言えばあなたへの罪滅ぼしです。」

それを聞いて俺は顔をしかめながらこう言った。

「罪滅ぼしで転生させてやるから機嫌を直せって言うのかよ、ふぎけんじゃねえぞ。」

「いえ、そんなつもりは毛頭ありません。ですが、さっきも言ったようにあなたの死は我々にとって都合が悪い、と。」

「そうだった、その俺が死んだから不都合なことってなんだよ。」

男が言っている不都合な事とは何なのかを聞く。

「それはあなたが生きていた世界はいずれある疫病が蔓延する事になるのですが、それをあなたが救うハズだったのです。それが不運にも交通事故によって潰えてしまった。」

ですから、と言葉を続ける。

「あなたには転生をしていたきたいのです。」

真剣な顔をしながらそう言って来る男に対して俺はこう言った。

「分かったよ、転生してやる。だが、俺の望む特典とやらは付けてくれるんだろうな?」

俺の言葉に対して男は無言のまま首を縦に振る。

男の行動を肯定と見た俺は要求する特典について話した。

俺が求めた特典

1. 全ての死ぬ気の炎(量はチェッカーフェイスの50倍で炎圧は5000万FV)

2. 『ボングレの血』
フラッド・オブ・ボングレ

3. 超直感と六道輪廻

4. 時雨蒼燕流とスクアードと幻騎士の剣技

5. 全てのボングレギア、時雨金時、ダイナマイト（無限）、XAN
XUSの二挺拳銃、パラボラ電気傘

6. XANXUSが使用していた特殊弾（無限）

7. リング（真ボングレリング、新ヴァリアーリング、マロツキヨ覚醒を果たしたシモンリング、セイニヨ気配のヘルリング、オツサ・インブレッシヨネ瞳のヘルリング、マロツキヨ残像 骨のヘルリング）

8. 匣兵器（ボングレ匣、ヴァリアー匣、アニマル匣、恐竜匣、その他の匣兵器）

9. ボングレ・ヴァリアー・ミルファイオーレ・復讐者・ヴァインディチエアルコバレー
ノ・シモン全員の戦闘能力

10. 六道骸×クローム髑髏×フラン×マーモン×デイモンD・スピード
並の幻術が使える。

それを黙って聞いていた男は口を開いた。

「これらの特典ですね、わかりました。」

男はそう言っただけで俺の頭に手を置き、呪文らしきものを唱えていく。
すると、俺の身体が光り始める。

それに対して呪文を唱え終えた男が俺にこう説明してくる。

「実はあなたに特典を与えました、その影響で身体が発光しているのです。」

それを聞いた俺は急に光り始めた身体の原因を聞いて納得をした後にこう言った。

「そうか、だったらREBORNの世界に転生させてくれよ。」

だが、俺の言葉に対して男はこう言ってきた。

「残念ながら転生する世界についてはくじ引きにて決めて頂くしかないのです。」

それを聞いた俺は舌打ちをしながらも男の出したくじ引きの棒を一本引き抜いた。

その棒に書かれた世界の名前は「ダンジョンに出会いを求めるのは

間違っているだろうか」だった。

それを見た男はこう言ってきた。

「転生する世界を確認しました、転生を開始します。」

その言葉を言った瞬間、俺の足元に魔方陣らしきものが出現し、俺の体が沈み始めた。

「では、新しい世界にてその力を振るって下さい。ついぞと言ってはなんですが、その世界の情報も付け加えさせていただきました。」

魔法陣に沈んでいく俺に対して男はにこやかな顔でそう言った。

「けっ、もう二度とその部下がへマしねえようにしておけよ。」

「はい、肝に銘じておきます。」

悪態をつく俺に対して男は頭を下げながらそう言ってくる。

そうして、俺は魔方陣に完全に沈みきると意識を失った。

「ヤバッ、転生魔法陣が憑依魔法陣になってる!?!ま、大丈夫ですよね、主人公に憑依しても…。」

そう言って呟く男は口を三日月のように開き、ニタリと笑みをこぼしていた。

冒険者登録、ヘステイア・ファミリア入団

俺は魔方陣によって転生することが出来た、いやこれについては憑依と言うべきなのだろう。

何故なら俺はこの世界の主人公である『ベル・クラネル』になっただけでしまっているからだ。

「どういうことだ、あの野郎は転生とかって言ってたハズだよなあ…。それがなんで憑依になっただけだあ!!」

俺は人気のない路地で今の状況について叫んだ。

叫んだ後、冷静になった俺は自分の格好を確認していく。

その格好はベル・クラネルがオラリオでファミリアを探していたころの姿と同じだった。

「つまり、俺はオラリオに着いたばかりのベル・クラネルに憑依したって事か。」

確認を終えると、俺はポケットに入れていた手紙を取り出して読み始めた。

手紙の差出人は俺を憑依させた男だ。

「どうも、主人公に憑依した気分はいかがですか？

まあ、悪いようになる事もないですよ。

特典についてなんですが…。

死ぬ気の炎はあなたが使用したい属性を選択すると、その属性の波動に変わります。複数の炎を同時に使う事も出来ません。憤怒の炎と夜の炎はリングが無しでも使用できます。

リング・匣兵器・ボンゴレギア・武器各種は魔法によって別空間に管理されているので好きな時に取り出せますし、盗難の心配はありません。万が一、盗まれたとしても居場所を知らせる機能が付いています。

ですが、この魔法を使用するにはどこかのファミリアに所属しなければなりません。改宗する際にも恩恵が切れているときは使用できません。

超直感と六道輪廻とボンゴレの血は既に発現していますが、六道輪

廻は能力を使わない時は普通の眼に見えます。

戦闘能力と剣技と幻術の力量も既に適応させていますのでご安心を。

—では、新たな人生を楽しんでください。

P.S. 転生じゃなくて憑依になってのは私が魔法陣を間違ったからです。ごめんね☆」

手紙を読み終えると、俺はこう呟いた。

「最後の方の文面がウゼエ。」

そう呟きながら俺は手紙を憤怒の炎で一瞬にして燃えカスにし、ため息を吐いた。

「とりあえずはギルドに行くとするか。」

そう言っただ俺はオラリオの中にへと入っていった。

ギルドに着くと、俺は早速冒険者登録をするために受付へと向かった。

「すまない、冒険者登録をしに来たんだが…。」

俺がそう言うと、受付の女性がこう言っただ来る。

「冒険者登録ですね、分かりました。では、こちらの登録用紙に名前・年齢などをお書き願います。」

そう言っただ女性は一枚の紙を取り出し、俺は紙を欄を埋めていった。

俺はその女性の顔には見覚えがあった、名前はエイナ・チュール、ギルドに所属するハーフェルフでありベル・クラネルのアドバイザーだ。

全て書き終えると、その紙をエイナに渡した。

「ベル・クラネル氏ですね、これで登録を完了とさせていただきます。新規の冒険者登録をされた方には簡単な講義を受けていただきますのでしばらくあちらの待合室にてお待ちください。」

「分かった、えつとあんたは…。」

俺はエイナの言葉に同意をし、情報で知ってはいても実際は初対面なため名前を聞こうとする。

「これは失礼をしました、私はエイナ・チュールと申します。これから君の専属アドバイザーを務めさせていただきます。」

「そうか、これからよろしく頼むエイナ。」

エイナの自己紹介の後、俺はそう言った。

「これからよろしくね、ベル君。」

この後、冒険者登録を終えて講義も終えた俺は『神の恩恵』^{ファールナ}を得るためにヘスティアのいるじゃが丸くん売り場にへと向かうのだった。

エイナSIDE

私の名前はエイナ・チュール、ギルドの受付兼アドバイザーをしています。

今日は新しく冒険者登録に来た男の子がいました、容姿が白髪赤目で兎を彷彿させるとても冒険者に向いていなさそうな大人しそうな子でした。

名前はベル・クラネル、彼と話をしてみても冒険者には向いていないと感じましたが…。

でも、不思議と不安になりませんでした。

こんな事は初めてだったけど、講義ではアドバイザーとして強く念を押していた。

”冒険者は冒険をしてはいけない”

この言葉の意味は安全第一の意味を込めて冒険者に伝えている事を講義の最後にベル君にも伝えた。

それじゃ意味がないな、と言ってくる彼の言葉が軽く聞こえてしまった。

講義を終えたベル君はギルドを出て、自分の所属するファミリアを探しに行った。

ベル君、無茶しちやダメだよ。

俺はじゃが丸くん売り場に行くと、そこには漆黒の髪に青い目をした女神がいた。

女神の名前はヘステイア、情報によるとベル・クラネルの所属するヘステイア・ファミリア主神である。

「いらつしやいませー、どれにしますか?」

俺が店の前に行くと、客と思い声をかけてくる。

「…神様だよな?」

俺がそう言うと、ヘステイア様がこう言ってくる。

「うん、僕はヘステイア、君の言う通り女神だよ。」

「俺をあなたのファミリアに加えてほしい。」

俺の言葉を聞いて、ヘステイア様は目を見開きながらこう言うて来る。

「ほ、本当かい?!」

「ああ、本当だ。」

俺に確認をとると、ヘステイア様は両手を上げて喜んでいる。

「じ、じゃあバイトが終わるまで待ってもらえるかい?」

「良いぜ、『ファミリア』に入れてくれるならいくらでも待つぜ。」

あれから一時間後、俺とヘステイアは様とある書店に入っていく。

店内には老齡のヒューマンがいて、ヘステイア様は二階の書庫を借りるというと老人は同意をする。

どうやら、この店主とは顔馴染のようだ。

書庫に入ると、ヘステイア様がこう言ってくる。

「さあ、服を脱いでここに座ってくれ。」

「分かった。」

ヘステイア様の言葉に俺は素直に従って上着を脱いだ。

「それじゃあ、これから君に僕の『恩恵』を刻むよ!!」

ヘステイア様はそう言って嬉しそうな声で『神の恩恵』^{フルナ}を刻んでいく。

「ベル君はどうして冒険者にどうしてなりたいたいと思ったんだい？」
その最中にヘステイア様が俺が冒険者になりたい理由を問いかけてくる。

俺は転生するはずだったのに憑依をしてしまったが、ベル・クラネルの目的を自分の意志でこう言った。

「俺は運命の出会いって言うのを求めてやってきたんだ。」

俺がそう言うのと、ヘステイア様はこう言ってくる。

「出会いって…、そんな事の為に君は冒険者になるのかい？」

「出会いは偉大なんだぜ、男の浪漫なんだからな。俺を育ててくれたおじいちゃんも『ハーレムは至高』だと言ってたし。」

「それ、君は育て親を間違えてるよ。」

そう話しているうちに、ヘステイア様は俺の背中に『神の恩恵』ファルナを刻み終えた。

【神聖文字】ヒエログリフの羅列が思わせるは一冊の本。

その本が綴るのは死ぬ気の炎を宿した異端の少年の物語、

【眷属の物語】ファミリア・ミイ

「さあ、ベル君、ここからボク達の『ファミリア』の始まりだ!!」

「おう!!」

真実の告白とステイタス登録

「な、なんだいこれはー!?」

俺の「ステイタス」を見たヘステイア様はいきなり大声を上げて叫んだ。

「どうしたんだ、ヘステイア様?」

俺が声をかけると、ヘステイア様はこう言ってくる。

「君の「ステイタス」なんだけど、見てくれ。」

ヘステイア様はそう言うって用意していた用紙に俺の「ステイタス」を共通語に訳したものを見せてくれる。

ベル・クラネル

level 9

力：A 8 9 6 耐久：B 7 5 3 器用：A 8 8 9 敏捷：S 1 0 3

9 魔力：A 8 2 7

剣士A 耐異常F 拳打E 魔防F 覚悟S 超直感S

《魔法》

モルテ・ファイアンマ・スバツジョ

【死炎の空間】

・空間魔法

・リング、匣兵器、ボンゴレギア、武器各種を保管・使用できる。
・他にもヴァリスや魔石、ドロップアイテムも保管出来る。

・入れた時点で時間が固定されるため、腐敗などの心配もない。

・詠唱式『開け 死炎の門 彼の求めるものは愛する者を守護し、あらゆる悪を破壊し、希望を照らす者の想いを汲み力を与えよ』

《スキル》

リアリス・フレージェ

【憧憬一途】

・早熟する

・懸想が続く限り効果持続

・懸想の丈により効果向上

モリレ・サラ・ファイアンマ

【死ぬ気の炎】

・大空七属性、大地七属性、憤怒、夜の炎をすべて純度100%で発動できる。

・使用する炎は選択可能・複合可能
・覚悟の強さで死ぬ気の零地点突破、ファースト初代・エディション、死ぬ気の到達点に至る事が出来る。

【六道輪廻ろくどうりんね】

・一の道：地獄道：相手に幻を見せ、永遠の悪夢により精神を破壊する

・二の道：餓鬼道：他人の技術を奪う

・三の道：畜生道：相手を死に至らしめるモンスターの召喚

・四の道：修羅道：眼から闘オーラ気を出し格闘スキルの強化

・五の道：人間道：身体に黒い闘マインドコントロール気を帯び格闘スキルの超強化

・六の道：天界道：相手を精神支配

なんだコレ…？

自分自身が見てもこの「ステイタス」は異常とも思えるだろう。

本来「ステイタス」の始まりはlevelのはずなのに、俺の最初のlevelが9と言うのは異常としか言いようがない。

これも特典の影響なのだろう、それが「ステイタス」にも出ている。そう思いながら見ていると、ヘステイア様がこう言ってくる。

「ベル君、君のステイタスなんだけどこれはどういう事なんだい？」

怪訝な顔をしながら聞いてくるヘステイア様に対して俺は真実を話すことにした。

「ヘステイア様、実は…。」

俺は全てを話した。

それを聞いたヘステイア様は口を開き、こう言ってくる。

「君が何者であろうともボクにとっては最初に出会えた最高の眷属ことどもだよ。」

そう言って向けてくれる微笑みに俺は感謝の気持ちで胸がいつぱいになった。

「ヘステイア様、俺頑張ります!!」

俺はそう言った後、ギルドに申請をするために書店を出ていく。

書店に残ったヘステイアは自分の眷属となった少年を見守りながらこう呟いた。

「頑張つてね、ベル君。」

その声音と瞳は穏やかで子供の旅立ちを見守る母親のようであった。

ギルドに着くと、俺は真つ先にエイナの元にへと向かった。

「エイナ、ファミリアに入ったから登録を頼む。」

俺がそう言うと、エイナは笑顔でこう言ってくる。

「それじゃあ、所属するファミリアの名前を書いて。」

そう言われて出された紙に俺は「ヘステイア・ファミリア」と書いた。

「ヘステイア・ファミリア」…、聞いた事のないファミリアだね。」

「さつき出来たばかりだからな。」

エイナの疑問に俺はそう言った。

「そうなんだ。それじゃあ「ステイタス」は…。何よこれー!!」

エイナはついさつき更新したばかりの俺の「ステイタス」(levelのみ)を記録した紙に目を向けて声を荒げた。

「やっぱり、俺の「ステイタス」を見ればこうなるよな…。」

「べ、べべべべべべベル君、この「ステイタス」本当なの!」

動揺を隠しきれずに声を上ずらせてそう言ってくるエイナに対し

て俺はこう言った。

「本^{マジ}当だ、俺のステイタスはその紙に記載されている通りだ。」

「…。」

「お、おい、エイナ!」

俺が「ステイタス」での問いかけにはつきりと言いつくと、エイナは白目をむいて微動だにしなくなった。

数時間後、エイナが意識を取り戻して俺にこう言ってくる。

「ベル君、昇^{ランクアップ}格をした冒険者にはその理由を提示してもらおう必要があるの。だから、この紙に書いてちょうだい。」

「分かった。」

エイナが持つてきた紙に成し遂げた偉業を書いていき、書き終わるとエイナに渡した。

『人間の限界を超える修行をしていたから』に『恩恵無しでモンスターを倒していたから』って…。普通は出来ることじゃないんだよ…。」

そう言いながら俺に視線を向けてくるエイナの眼は疲れ切っていた。

「すまないな、迷惑をかけてしまつて。今度、何かお礼をさせてくれ。」
「うん、今回はそれでいいよ。」

俺は謝罪をすると共にお詫びをするという約束を取り付けた。

そんなやり取りを終えると、俺は立ち上がりながらこう言った。

「それじゃあ、俺はこれからダンジョンに潜ろうと思つているからもう行くぜ。」

俺がそう言うと、エイナはこう言ってくる。

「ちよつと待つて、ベル君武器も防具も持たないでどうやってダンジョンに潜るつもりなの!?!」

そう言ってくるエイナに対して俺は手をヒラヒラと振りながらこう言った。

「まさか、今から本拠^{ホーム}に戻つてから行くんだよ。」

「そうだよね、良かった。君の場合、levelが高いからこのまま行くつて言いそうだから。」

「流石に俺でもそれはねえよ。」

そう話した後、俺はギルドを出るとそこにはヘステイア様が立っていた。

「ベル君が飛び出して行つちやうから、本拠^{ホーム}の場所を伝えそこなつたから知らないと思つて迎えに来たんだよ。」

「そうだったのか、申し訳ない。」

ヘステイア様の言葉に俺は頭を下げてそう言った。

「じゃあ、ベル君行こうか、僕らのホームに！」

「おう!!」

ミノタウロスと剣姫との出会い

オラリオの北西と西に挟まれたところにある廃教会の隠し部屋、ここが俺達へスティア・ファミリアの本拠^{ホーム}である。

「ごめんねベル君、本拠がこんな所で…。」

へスティア様はそう言いながら顔を俯かせるのに対して俺はこう言った。

「そんな事ねえよ、それにここからのし上がっていく方が面白れえじゃねえか!!」

俺の言葉を聞いたへスティア様は笑顔になってこう言うてくる。

「そうだね、ベル君。これから頑張っ行ってこうじゃないか!!」

「おう!!」

あの後、俺はへスティア様と分かれてダンジョンに来ていた。

正直に言って、上層と呼ばれる階層のモンスターは弱すぎる。

有幻覚で出来たナイフの一撃で倒せてしまうのだから。

退屈な気持ちを抑え込みながら魔石を『^{モルテ・ファイアンマ・スパッジオ}死炎の空間』の中にへ

と放り込んだ後、俺は五階層にへと降りて行っった。

五階層に降りて最初に思ったことはモンスターが少なすぎるといふことだ。

その原因は俺の目の前に現れた、それはミノタウロスだ。

本来、中層にいるはずのミノタウロスが何故この上層にいるのかは男の寄越した情報によって把握している。

遠征の帰り道、ロキ・ファミリアの前にミノタウロス大群が現れた。

だが、ロキ・ファミリアの冒険者には中層のモンスターは雑魚に等しい。

そんな戦力を本能で判断したのか、ミノタウロスの大群は一斉に逃げ出した。

モンスターの逃走に不意を突かれたロキ・ファミリアは急いで追いかけるも、ミノタウロスは散り散りに逃げていく。

しかも、最悪なことにミノタウロスは上の階層にへと登って行ってしまう。

それを追いかけるロキ・ファミアも散り散りとなって討伐していく。

そんな時、ベル・クラネルはダンジョンの五階層にへと潜っていた為が上がってきたミノタウロスと遭遇をし、襲われる。

そこをロキ・ファミアリア幹部であり当時level5の『劍姫』けんきアイズ・ヴァレンシユタインに助けられ、憧憬を抱いた。

そう思いながら俺は詠唱を唱えた。

『開け 死炎の門 彼の求めるものは愛する者を守護し、あらゆる悪を破壊し、希望を照らす者の想いを汲み力を与えよ』

『モルテ・フイアンマ・スバツジョ死炎の空間』

ミノタウロスを視界に捉えながら『死炎の空間』から特殊弾が装填されたXANXUSの二挺拳銃を取り出し、銃口を向けた。

「散れ、カス。」

そう言いながら引き金を引き、銃口から憤怒の炎を圧縮させた特殊弾が放たれた。

その弾はミノタウロスに命中した瞬間、上半身が消し飛んだ。

ミノタウロスが死んだと判断した俺は魔石を回収しようとするが、上半身ごと魔石を消し飛ばしたため回収は叶わなかった。

俺はそれを見て溜息を吐きながら進もうとしたとき…。

「ねえ、さっきのどうやったの？」

俺に声をかけてくる奴がいた。

その声の方向に目を向けると、そこにはアイズ・ヴァレンシユタインがいた。

アイズSIDE

私の名前はアイズ・ヴァレンシユタイン、ロキ・ファミアの一員です。

私達は遠征から帰る途中、ミノタウロスの大群に遭遇したの。でも、ミノタウロスくらいなら苦勞することなく倒せる。

そんな時だった、仲間が一体目のミノタウロスを倒した瞬間他のミノタウロス達が逃げ出した。

「おい、テメエらモンスターだろ!？」

私以外の皆もその行動に驚いてたけど、すぐに意識を取り戻してミノタウロスを追いかけた。

ミノタウロス達は散り散りとなってダンジョンの中を移動をしていく、中には上の階層に行くミノタウロスもいた。

私達は確実に葬っていき、最後の一体と思われるミノタウロスに一撃を放とうとした瞬間強烈な何かを感じて後ろに飛んだ。

その後、一直線に伸びてきた橙色の光線がミノタウロスの上半身を魔石ごと消し飛ばしてしまった。

それを見た私はあれを会得できたなら更なる高みに昇れる気がした。

そう思い、私は彼に声をかけた。

「ねえ、さっきのどうやったの?」

純白の雪のように白い髪に紅石ルビーのように赤い眼をしている彼に…。

狼人と有象無象の処刑

「お前、誰だ？」

初めて会う事になっているアイズ・ヴァレンシユタインにそう言う
と、こう言ってきた。

「私はアイズ・ヴァレンシユタイン、君の名前はなんていうの？」

「俺の名前はベル・クラネルだ。」

そう、と言って互いに口を閉ざしてしまおう。

すると、そこへ灰色の髪に琥珀色の眼をした狼^{ウエアウルフ}人の男がやってき
た。

「アイズ、ミノタウロスを始末したんならさっさと戻るぞ!!」

そう言ってくる狼人の名前はベート・ローガ、【ロキ・ファミア】
の幹部でありlevel5の第一級冒険者、二つ名は【凶^{ヴァナルガンド}狼】

「ベートさん。」

そう言いながらアイズはベートの方に振り向くと、俺の姿がベートの
目に留まる。

「ん、おいアイズ、なんだその雑魚は？」

そう言ってくるベートに対して俺はこう言った。

「るせえぞ、カス牛を上層まで逃がした奴に雑魚呼ばわりされる覚え
はねえ。」

俺の言葉に呆気にとられるも早々に意識を取り戻し、ベートがこう
言ってくる。

「おい、今なんつったテメエ…!!」

その言葉は低くドスの効いた声だが、恐怖など抱く事もなかった。
「聞こえてなかったのか。しょうがねえからもう一度言ってる、テ
メエらが油断しているからカス牛が上層までやって来たんだらう
が。」

俺がその言葉を言い切った瞬間、長い脚が俺の横顔にへと飛んでき
た。

「ベートさん!?!」

アイズがベートの行動に驚きの声を上げる。

が、俺はそれを片手で受け止める。

「!!?」

目の前で起こったことにベートとアイスが目を見開いている。

それもそうだろう、冒険者の中でもlevel5といえればオラリオが誇るトップクラスの実力者、その実力者の蹴りを片手で防げるなど同等、それ以上の実力者だけしかない。

「テメエ、いったい何モンだ?」

先ほどよりも冷静になったベートはそう問いかけてくる。

それに対して俺はこう言った。

「今日オラリオに来たばかりの新米の冒険者だ。」

それを聞いた二人は目を見開き、こう言ってくる。

「level1の奴が俺の蹴りが止められるわけがねえだろうが!!」

「どうやってベートさんの蹴りを止めたの?」

ベートは怒りが入り混じった声で、アイズは純粋な疑問の声でそう言ってくる。

「簡単な話だ、俺がそいつより上だってことだ。」

俺はベートを指さしながらそう言い切った。

それに対してベートはこう言ってくる。

「だったら、テメエのレベルはいくらなんだよ。」

そう言っただけで睨み付けてくるベートとじつと見つめてくるアイズに向かって自分の今のlevelを答えた。

「俺のlevelは9だ。」

そう言くと、二人は目をギョツとさせながらこう言ってくる。

「ありえねえ、テメエ何をしてそんなにも上がりやがった…。」

「どうやってたらそんなに早く強くなれるの?」

そう言ってくる二人に対して俺はこう言った。

「それくらいテメエで考えたらどうだ?じゃあな。」

俺は二人に背を向けてきた道を戻り、ダンジョンの外にへと出るのであった。

アイズ side

私は驚きを隠せなかった、ベルが私よりも強さの高みにいることに。

どうしたらベルの様に強くなれるの？

「それくらいテメエで考えたらどうだ？じゃあな。」

知りたい、どうしても…。

そう思いながらベルを引き留めようと歩き出そうとした時、ベートさんが肩を掴んでこう言ってくる。

「今は遠征の帰りだ、フィン達と合流するぞ。」

その言葉に対して私は反論できずにベートさんと共にファミリアの仲間と合流するために移動する。

ダンジョンから出ると、俺は換金所に向かう事にした。

摩天楼施設の換金所に着くと、そこでは換金所のスタッフとどこかのファミリアの冒険者が口論になっていた。

確か、そのファミリアってリルルカ・アーデって小人族の女の子が所属していたファミリアだったっけ。

そう考えながら俺は空いている換金所の窓口に行き、換金を頼む。数十分後、俺の持ってきた量の魔石に見合った金が置かれ、それを受け取ると換金所のスタッフがこう言ってくる。

「今度から上級冒険者が使う換金窓口で換金してくれ、でない君の持ってくる量はこっちでは捌き切れない。」

その言葉に俺は苦笑をしながら分かりました、と言って換金所から出ていくのだった。

俺はバベルを出て人気の無い路地に入っていく、理由は俺の事を

追ってきている連中がいるからだ。

路地を進んでいくと、丁度いい具合に暴れられる広場的な場所に出た俺はこう言った。

「さっさと出て来いよ、バベルからついてきてるのは分かっただ。」俺が声を荒げながらそう言うと、周囲の物陰から数十人の男が現れた。

「へへっ、俺達に気付いてるとは中々感が鋭いじゃねえか、坊主。」

そう言ってくるのはでっぴりと太った男(デブカス)、それに対して俺はこう言った。

「るせえ、カスが。」

俺はそう言った瞬間、詠唱に入った。

『開け 死炎の門 彼の求めるものは愛する者を守護し、あらゆる悪を破壊し、希望を照らす者の想いを汲み力を与えよ』

『モルテ・フイアンマ・スバツジョ死炎の空間』

魔法の詠唱に入った俺の姿を見て、男共は慌てだす。

「落ち着け、恐らくあの魔法の類は自分の強化するだけだ。」

が、デブカスは落ち着いた声でこう言って男共を冷静さを取り戻させる。

やはりカスだな、俺の魔法はそんなチャチなもんじゃねえ。

「そうだったのか、驚かせやがって…。クソガキが!!」

冷静になった男の一人が剣を片手に俺に襲い掛かってくるが、剣が俺の身体に触れることはない。

何故なら、その剣を持った男は石化したからだ。

目の前で起こったことにデブカスを含む男共はどよめいた。

「どうしたカス共、さっきまでの威勢はどうした?」

俺はデブカス共に向かってそう言うと、デブカス共の顔は恐怖の感情に支配された顔になっていた。

「フン、所詮は数に頼っているだけのカス共か。」

俺は嘲笑を含んだ言葉を吐き、隣にいる生物にこう告げた。

「ベスター、このカス共をカッ消せ。」

そう、さっきの男を石化させたのはこのベスターである。

俺は『死炎の空間』から大空の新ヴァリアーリングを取り出し、ベスターを呼び出したのだ。

俺の命令にベスターは唸り声を上げながら俺の前に立ち、咆哮をカス共に向かって放つ。

『ルツジート・デイ・チエーリ天空の咆哮』

ベスターの咆哮を受けたカス共は全員石化をしたのち、粉々に砕け散り砂と化した。

「俺に盾突くからそうなんだよ、カス共。」

そう言い残した後、俺は本拠ホームにへと帰っていくのだった。

銀髪の給仕と下層への進行

カス共をカツ消した俺は本拠ホームに帰ってくると、ヘステイア様が出迎えてくれる。

「おかえり、ベル君!!」

「ただいま、ヘステイア様。」

俺とヘステイア様は互いに挨拶をし終わると、晩御飯としてじゃが丸くんを食べ始める。

「ヘステイア様、明日もダンジョンに行くんですけど帰りが遅くなりそうだから俺の分の夕飯は無くていい。」

「そうなのかい、分かったよ。でも、無茶だけは止してくれよ、君は僕のため一人の眷属ファミリアなんだからね。」

「分かってるって。」

そう軽く話しながらじゃが丸くんを食べていくのだった。

早朝、目が覚めた俺はヘステイア様に行ってきますという置手紙を残し、朝食にじゃが丸くんを三個ほど紙袋に入れてダンジョンに向かう。

「あの…、コレ落としましたよ?」

その途中、歩いている俺の後ろから誰かが声をかけてくる。

俺が後ろを振り向くと、そこには手の上に豆玉サイズの魔石を乗せた銀髪ツインテールの女の子がいた。

この女の子の名前はシル・フローヴァ、豊饒の女主人で働くヒューマンだったな。

「サンキュー、えつと名前は?」

俺はシルの手の上の魔石を取り、礼を言いながら名前を問いかける。

「私の名前はシル・フローヴァといいます、そこの【豊饒の女主人】という酒場で働いているんです。」

「俺はベル・クラネル、ヘステイア・ファミリアの冒険者だ。」

俺とシルは互いに自己紹介をした後、シルの指さす場所には【豊饒の女主人】があつた。

「礼の代わりに飯を食いに来いってことね。」

「!? どうしてわかつたんですか?」

俺の言葉にシルは驚き、その分かつた理由を聞いてくる。

「簡単な事だ、言葉より目に見える礼の方が良いだろう?」

俺がそう言うのと、シルはほほをぷっくりと膨らませてこう言ってくる。

「確かにそうですね、もう知りません。」

ぷいっと顔を逸らすシルに対して俺はこう言った。

「それじゃあダンジョンの帰りに食べにくるよ。」

「はい、お待ちしていますね!!ベルさん、いつてらっしゃい!!」

「行つてきます。」

俺がそう言うってからダンジョンに向かうと、シルは満面の笑みでそう言つて送り出してくれた。

ダンジョンに入ると、俺は敏捷のスキルと最大限に発揮して移動を開始する。

俺の前に現れる上層のモンスター達は有幻覚で作つた剣で肉を抉る形で振るい、露わになつた魔石を採取する方法で攻略をしていく。

そうして移動すること15階層。

だが、それにも飽きた俺は走るのをやめて歩き始めた。

その時、ある一団が俺の隣を勢いよく通り過ぎた。

そんな事に気をやる事も無く俺は先に進もうとした時、目の前に大量のミノタウロス、アルミラージュ、ヘルハウンドが数百もの群れを成して迫つてきていた。

『怪物贈呈』

その光景を目にした俺は笑いながらこう言った。

「せいぜい俺を楽しませろよ、怪物共」

俺はそう言った後、有幻覚の剣を豪快に振るいながら特攻を仕掛ける。

『スコントロ・ディ・スクアエロ
鯨 特 攻』

繊細さは皆無に等しい豪快にして凶暴な剣技は目の前にあるモノを猛進しながら斬り刻んでいく。

それが止まる頃には目の前にいたモンスター達は全て根絶やされている。

「中層もこの程度か、カスだな。」

俺は倒したモンスターの魔石やドロップアイテムを全て回収すると、さらに下にへと降りて行った。

手応え皆無のモンスターに苛立ちを隠せなくなった俺は溜息交じりにこう言った。

「ハア、退屈だ。」

そう声を零した後、俺は更に下層にへと向かった。

【ロキ・ファミアリア】

【ロキ・ファミアリア】本拠^{ホーム} 黄昏の館

その最上階の一室には派閥の主神であるロキが顔に皺を寄せながらとある案件が記された用紙に目を通していた。

その案件というのが新興派閥である「ヘステイア・ファミアリア」に世界初のlevel9の冒険者が現れたと言うものである。

「…どうゆうこつちや、コレ。」

ロキは信じられないという感情を隠す事もなく顔に出しながら言葉を発した。

それもそうだろう、発足したばかりの【派閥】^{ファミリア}に迷宮都市^{オラリオ}はおろか世界初のlevel9という最高保持者が所属しているのだから。

このあり得ない出来事にロキは頭の中で考えを巡らせて行く。

（下チビの奴が神^{アルカナム}の力を使っただちゅーことなんか？それはないか、そんな事したらウチを入れた神共に気づくしな。それやったら、このlevelの数字はそいつの本来の実力から引き出されたちゅーことなんか？もし、そうやったらこの情報はアイズには教えられへんな。）

ロキはそう考えながら己の眷属である金髪金目でヒューマンの少女の事を思い浮かべる。

幼き頃から少女は求め続けている、如何なる敵を圧倒する強さを。

その為なら身体がそれだけ傷つこうとも無関心に強さを求めてしまっている。

そんな少女が件の者と接触をすれば今よりも酷く強さを求めてしまおうという危惧がロキの頭の中にはあった。

そう考えていると、部屋の扉をコンコンと叩く音が響く。

開いてるでー、ロキがそう声を掛けると扉の向こうから派閥の団員の一人が入って来てこう言ってくる。

「ロキ、団長達が遠征が帰ってきました!!」

そう言ってくる団員に対してロキのとった行動は…。

「帰ってきたか、ほな行くで!!」

遠征組の出迎えに行き、タイミングを見計らって遠征組の女性陣に

向かって突撃を仕掛ける。

「おつかえりii!!」

突撃を仕掛けるロキを女性陣は手慣れているのか簡単に躲して行く。

が、列の最後尾にいた山吹色の髪を後ろにまとめているエルフの少女がぎゃあーという声を上げながら抱き着かれ、押し倒されてしまった。

「うへへ、レファイヤおっばいおつきなったんちがうんか?」

その言葉を聞くだけでエロ親父で、女神の要素が皆無である。

そんな事もありながら「ロキ・ファミリア」の遠征は終わりを告げたのであった。

遠征から帰ってきた翌日

「ロキ・ファミリア」の主神、首脳陣、幹部全員が会議室に集結していた。

この会議の議題は勿論、「ヘスティア・ファミリア」ベル・クラネルの事についてである。

最初にこの名前を言った瞬間、金髪金目でヒューマンの少女が反応する。

その少女の名はアイズ・ヴァレンシュタイン、ロキ・ファミリアの幹部にして【剣姫】^{けんき}という二つ名を持つlevel5の第一級冒険者だ。

「アイズ、^{ベル・クラネル}彼の事を知っているのかい?」

アイズに優しく問いかけるのは一人の金髪碧眼の少年だった。

この少年は「ロキ・ファミリア」首領にして【勇者】^{ブレイバー}の二つ名を持つ小人族^{バルウム}のlevel6の第一級冒険者、フィン・ディムナだ。

「うん、遠征の帰りにミノタウロスが逃げたでしょ。」

アイズがそう言うと、他の幹部達が反応をする。

「それって15階層の奴だよね、それがどうかしたの?」

そう言ってくるのはアマゾネスにしてはスレンダーな体型をしている少女ティオナ・ヒリユテ。

彼女もアイズと同じlevel5の第一級冒険者であり「^{アマゾン}大切断」という二つ名を持っている。

そんな彼女の言葉にアイズを頭を縦に頷く。

「その時に5階層までミノタウロスが行っちゃって、そこでベルに出会ったの。」

アイズの言葉に耳を傾けていた三人が疑問に思った。

その三人というのはロキ、レフイーヤ、ベートである。

「アイズたん、何でベル・クラネルの事名前呼びなん?」

ロキは真相を知るためにそう問いかけると、アイズはこう答えた。

「だって、好きな呼び方でいいって言ったから。」

その言葉を聞いた三人のうち二人が吐血し、一人は身体ごとよろけてしまう。

「ロキにレフイーヤにベートさん、どうかし…。」

「アイズ、話の続きをお願いできるかな?」

「えっ、う、うん。」

※言わずもながら、吐血はロキとベートでよろけたのはレフイーヤである。

そんな三人にアイズはどうしたのかと聞こうとしたが、フィンの言葉で続きを話し始める。

「それでね、ベルはミノタウロスを変った武器で消し飛ばしたの。」

「「「「「!?」」」」」」

アイズがそう言った瞬間、全員の顔つきが変わった、：冒険者の顔に。

「アイズ、その消し飛ばしたと言うのは魔法を使用したと言う事なのか?」

そう言ってくるのは翡翠の髪と目をしたハイエルフの女性、リヴェリア・リヨス・アールヴ。

彼女は【ロキ・ファミリア】副団長で【^{ナイン・ヘル}九魔姫】の二つ名を持つlevel6の第一級冒険者である。

「ううん、ベルはスキルって言った。」

リヴェリアの問いにアイズは否定をした後スキルであると伝える。
「フム、ミノタウロスを消し飛ばす事が可能なスキルか……。面白い奴が現れたものだな。」

そう言いながら笑い飛ばしているのは口と顎に髭をたつぷりと蓄えたドワーフの大男、ガレス・ランドロック。

彼もまた【ロキ・ファミア】最古参の幹部として在籍しており、

【エルガルド重傑】という二つ名を持つlevel6の第一級冒険者だ。

「でも、消し飛ばすなんて聞いちゃったら血が騒ぐわね。」

そう言いながら好戦的な笑みを浮かべているのはティオナの姉のティオネ・ヒリュテ。

彼女も妹と同様、【ヨルムガンド怒蛇】という二つ名を持つlevel5の第一級冒険者である。

「チツ!!」

ベートは周りの声を聞いていて気に食わないと言わんばかりに舌打ちを打つ。

「それでもスキルの効果だけで消し飛ばすなんて不可能なんじゃないんですか?」

そう言っているのは山吹色の髪をしたエルフの少女、レフイーヤ・ウイリデイス。

【ロキ・ファミア】の団員にしてリヴェリアの後釜とされている、サウザンド・エルフ【千の妖精】という二つ名を持つlevel3の第二級冒険者である。

「いや、相当なレアスキルが関係しているのかもしれないぞ。」
と、リヴェリアの言葉に全員が納得の意見せる。

「ま、この件に関しては保留にしようか。ここで憶測を言うとしてもしょうがないわ。」

ロキの言葉に誰も反対はせず、その場で解散となった。
全員が会議室を出ようとすると、ロキがこう言ってくる。

「あつ、そうや。今日の夜は【豊饒の女主人】で打ち上げやからなー。」
ロキはそう言つて自室に戻っていくのだった。

調整と豊饒の女主人

中層で起こった怪物贈呈を撃退し更に下層にへと降りて行った俺は今51階層にきている。

そこで俺はモンスターを使って匣アニマル達の調整を行っている。「殺れ。」

俺の短くも分かりやすい命令に匣アニマルたちはモンスター達を蹂躪していく。

パンテラ・テンベスタ

嵐 豹となった瓜やアークはブラックライノスの首を噛み千切り、ロールがデフォルミス・スパイダーを球針態で串刺しにしていく。ナツツとベスターが魔石ごとモンスターを消し飛ばしたり、牛井が雷の炎を帯びた状態での突進でブラックライノスの大群を轢き殺していくなど苦戦皆無でモンスターを蹂躪していく。

俺は朝市の露店で購入した紅茶とサンドイッチで胃の中を満たしながら匣アニマル達の蹂躪劇を見ているのだが、…暇だな。

そう思っていると、匣アニマル達がモンスターを全て片付けて戻ってきた。

「よくやった、よく休め。」

そう言つて匣アニマル達を空間に戻すと、俺はサンドイッチの最後の一切れを食べ終わると地上にへと戻っていく。

地上に戻つてくると、早朝だった空が夕方方の空にへと変わっていた。

それだけの長時間ダンジョンに潜っていたことを教えているかのように思えた。

俺は夕日の日差しを受けながら魔石を換金しに行くのだった。

換金を済ませると、俺は西のメインストリートにある酒場「豊饒の女主人」にへと向かうのだった。

西のメインストリートに入ると、ダンジョン帰りの冒険者やサポーターが眼に入ってくる。

そして、その中を歩いていくと、見えてくるのが目的地である豊饒の女主人だ。

扉を開けると、ある一団が目に入って来た。

それはオラリオ二大派閥の一角・「ロキ・ファミリア」である。

やべえな、俺はベートを挑発してあるからな、どんな因縁吹っかけてくるかわかんねえぞ。

そう思っていると、一人見覚えのある銀髪の女性給仕が近づいてくる。

「いらっしやいませ、ベルさん。もうずっと待ってたんですよ!!」

そう言っつて頬を膨らませるのは、早朝ダンジョンに向かう途中に出会ったこの店の給仕のシル・フローヴァ。

「悪いな、今の今までダンジョンに潜ってたもんだからよ。」

「そうだったんですか、それじゃあお腹ペコペコなんですか？満足のいくまで食べて飲んでくださいね、私のお給金のためにも。」

「はいはい。」

「何ですか、その反応?!」

「シル、いつまでも喋ってないで働きな!!」

俺の反応に対して頬を膨らませるシルだったが、ミアさんの怒声を受けて俺を席に案内をする。

その途中、シルがベルさんのせいですよ、と言ってくるが気にしない。

席に着くと、さっそく俺がメニューを見ると、そこにはステーキやパスタなどのメニューがあつて中でも酒の種類が多いようだ。

「それじゃあ、ステーキとパスタを一つずつとドワーフの火酒を一本を頼む。」

俺がそう言うと、シルは戸惑った顔をしている。

「ベルさん、ドワーフの火酒を飲まれるんですか?」

「ああ、何か不味い事でもあるのか?」

シルの問いかけに対して俺はそう問い返す。

「いえ、何でもありませんよ。」

問題ないと言いなながら笑みを浮かべた後、注文を厨房へと伝えに

行くのだった。

「（賑やかだな、結構好きな雰囲気だ。）」

俺が注文を終えてすぐにドワーフの火酒が小さめのグラスと共に運ばれてきたので小さめのグラスに注ぎ、煽ると喉が焼けるような感覚が起こる。

「なるほど、火酒と言うだけに辛口の酒だったのか。」

俺はそう言いながらグラスに残った火酒を一気に飲み干すと、次の火酒を注ぐ。

すると、俺の隣に誰かがやってくる。

「また会ったね、ベル。」

その人物はダンジョン5階層で出会った【剣姫】アイズ・ヴァレンシュタインだった。

飲み比べと帰路

「また会ったね、ベル。」

「あ、ああ、そうだな。」

再会の言葉を言ってくるアイズに対して俺はそう返答をする。
すると、アイズの隣からもう一人がやってくる。

その人物は「ロキ・ファミリア」団長フィン・ディムナである。

「初めまして、ベル・クラネル。僕は「ロキ・ファミリア」の団長を務めているフィン・ディムナだ。」

「それは、丁寧にも、知っての通り俺は「ヘスティア・ファミリア」所属のベル・クラネルだ。」

そう言っ握手を求めてくるフィンに対して俺は応じる事にした。
握手を交わした後、フィンがこう言っ来る。

「君には感謝している、僕達を取りこぼしたミノタウロスを処理してくれたことに対してね。」

「どうでもいい。」

俺が興味ない感じにそう言っただが、フィンはそれを聞いても引き下がろうとしない。

「いや、僕達の不手際で君には迷惑を掛けてしまったからね、何かしらの謝礼をしたいんだ。」

そう言っ来るフィンの眼は何が何でも引かないという目をして
いる為、ここは俺が折れるしかないと思った。

「解かっつた、酒代そっちで払っつてくれりゃあそれでいい。」

俺の言葉を聞いて、フィンはこう言っ来る。

「それは構わないが、本当にそれだけでいいのかい？」

「くどい、俺がそれでいい言っっている。」

フィンの言葉に俺は強めの声でそう言っつた。

「それなら受け入れるしかないね…、そうだ、君もこっちで一緒に食事をしないかい？」

そう言っってくるフィンに対して俺はこう言っつた。

「いや、それは遠慮させて貰おうか。部外者である俺が参加するのは

可笑しいだろ。」

俺がそう言うのと、フィンとアイズは反応してくる。

「いや、僕以外にも君と話をしたいと思っっている者達がいるんでね、それは大丈夫だよ。」

「私ももつとベルと話がしたい。」

そう言っつて来る二人に対して俺はこう考えていた。

「まあ、これを機にヘステイア様と神ロキの仲を取り持つ事が出来るかもしれないな」

俺がそう考えをまとめると、再度フィンが問いかけてくる。

「それで、返事はどうかかな？」

折角の【勇者】と【剣姫】の誘いだ、受けよう。」

それを聞いたフィンは満足そうに頷き、アイズはグラスを持っている俺の右腕を手にとると引いてくる。

「こっちにきて。」

「あ、ああ、解かった。」

俺はシルに席の移動の事を伝えた後、アイズに手を引かれるままに火酒とグラスを持った状態でロキ・ファミリアの打ち上げの場へへと足を踏み入れた。

ロキ・ファミリアの打ち上げの席にやっつて来ると、俺はまず自己紹介をする。

「初めまして、「ヘステイア・ファミリア」に所属しているベル・クラネルと申します。以後、お見知りおきを。」

俺がそう挨拶をすると、何人かを除いて歓迎の声を上げる。

その何人かというのはロキ、ベート、レフィーヤである。

まあ、考えている事は丸わかりだな。

そう考えていると、一人のドワーフが話しかけてくる。

「お前さんの持つている酒はドワーフの火酒じゃな、飲んでも何とも無いのか？」

それはガレス・ランドロックだった。

そう言っつて来るガレスの言葉に対して疑問に思った俺はこう問いかける。

「すまない、俺は今日初めてこの酒を飲んだからよく分からないんだが、どういう事なんだ？」

それを聞いたガレスや周りの連中の視線が俺に集まって来る。

「??」

それに対して疑問が尽きない俺に対してガレスがこう言って来る。

「その酒は非情に度数がきつくてのう、ドワーフにしか飲めない代物なんじゃ。」

「そうだったのか、辛口の酒ではあるからきついとは思っていたが…。」

ガレスの話を聞きながら火酒を瓶ごと飲み干していくのだった。

それに対してガレスは大声で笑いながらこう言って来る。

「ガハハハハハッ!!よし、ベルよ、飲み比べと行こうではないか!!」

飲み比べの勝負を仕掛けてくるガレスに対して俺はこう答えた。

「いいぜ、勝負だ!!」

勝負受理の言葉に対してロキがこう言って来る。

「ヨッシャ、それやったらウチも参加すんで!!勝者はベル・クラネルに質問攻め出来る権利や!!」

しかも、勝者への報酬が俺への質問攻めとは中々に考えたな。

「…!! 私もやる。」

ロキの一言に対してアイスが参加の意を示す。

その一言に俺以外のロキ・ファミリア全員が静まった。

「おい、どうしたんだ？」

俺がそう問いかけると、ガレスが小声でこう言って来る。

「実はアイズは酒に弱くてのう、昔酒によつてロキの事を半殺しに仕掛けてな。」

それを聞いた俺は顔を引くつかせながらこう言った。

「そうだったのか、神ロキも災難だったな。」

「まあ、ロキが酔ったアイズにセクハラしようとしたのが原因なんじゃがな。」

「自業自得じゃねえか!!」

それを聞いて俺はツツコミを入れずにはいられなかった。

そうして、飲み比べが始まったのだがアイズは慣れない酒にも関わらずグビグビと飲み干していく。

だが、俺も負ける気は毛頭なく火酒の瓶を次々と空にしていく。そうやって飲み比べを始めて三十分が過ぎた頃、ロキや参加していたロキ・ファミリアの団員達も酔い潰れてしまった。

俺とガレス、アイズが未だに飲み比べを続けている。

「タハツ、五十本目!!」

俺はそう言って空になった酒瓶をテーブルの上にへと置く。すると、そこでフィンがこう言って来る。

「ベル、もうそのくらいで終わってくれないかい？ガレスは酒に慣れているから大丈夫だとしても、アイズの方は…。」

フィンの言葉を聞いてアイズの方に目を向けると、苦しそうにしているアイズがいた。

「分かった、これ以上あいつに飲ませるのは危険だな。」

俺はそう言って酒を飲み手を止める。

結果から言うと、俺五十本・ガレス五十本・アイズ十本である。打ち上げの方も終わりが近づいてきた。

俺は椅子から立ち上がると、足元がふらついてしまう。すると、シルが俺に肩を貸してくれる。

「ベルさん、大丈夫ですか？」

そう言って来るシルに対して俺はこう言った。

「ああ、少し酔っているみたいだ。」

そう言っていると、一人のアマゾネスの少女が近づいてきてこう言ってくる。

「私が送ってあげようか？」

俺にそう言って来るのはティオナ・ヒリュテだった。

「いや、酒を奢って貰った上に送って貰うのは流石に…。」
俺が断ろうとするが、フィンがこう言って来る。

「いくらlevel9だとしても今の状態だと危ないんじゃないかい？」

「…(そうは思えねえけど)よろしく頼む。」

フィンの言葉に納得をし、テイオナの手を借りる事にした。
豊饒の女主人を出て、俺はテイオナに肩を借りながら本拠にへと帰っている。

「ねえねえ、ベルってさどうやってlevel9になったの？」

「それについてはアイズにも言ったが、それは自分で考えろってな。」

「えーっ!？」

俺の言葉に対してテイオナはぶうたれてしまう。

「だが、俺が強くなれたのはある人達がいたからだ。」

「ある人達？」

俺の言葉にテイオナは疑問に思いながらそう言ってくる。

「ああ、俺はそのある人達に憧れていたから強くなる事が出来たんだ。」

「それじゃあ、その人達がベルにとっての英雄なんだ!!」

「英雄か、ある意味そう言えるのかな。」

「？」

俺とテイオナが話しながら歩いていると、本拠近くまでやってきていた。

「ここまで送ってくれてありがとう、テイオナ。」

「いいよいいよ、私もベルと話せてよかったと思ってるし。」

俺が礼を述べると、テイオナは気にしなくてもいいと言ってくる。

「またな。」

「またねー!!」

俺達は別れの挨拶をした後、それぞれの本拠まで戻っていくのだった。

【邂逅】

遠征から帰ってきて翌日の夜、私達は「ロキ・ファミリア」の遠征組はその打ち上げ会場である【豊饒の女主人】に来ている。

そして、ここでもベルについての話が続いている。

「でもさ、スキルで消し飛ぶってどういう感じなのかな?」

ティオナが料理を食べながらそう言うと、レフィーヤがそれに答える。

「魔法でもないのにそんな事が出来る希少^{レア}スキル、これは他の神達に目をつけられることは確定ですよね。」

レフィーヤの言葉に対して、私もこう言った。

「ベルは消し飛ばしたときに変わった武器を持ってた。」

私の言葉にティオナとレフィーヤが反応する。

「変わった武器ってどういうの?」

「専用^{オーダーメイド}武装という事でしょうか?」

「分からない。」

ティオナ達の問いかけに私は答えることは出来なかった。

そう答えた後、「白」が私の隣を横切るのが見えた。

私が急いで横を向くと、そこにはベルがいた。

私はベルを確認した後、すぐに話しかけたい衝動を抑えながらフィンの元にへと向かった。

「フィン。」

「どうしたんだい、アイズ?」

私が声をかけると、フィンはお酒を飲んでいて顔を赤くさせていた。

「ベルがいた。」

『!!』

私の一言に皆は食事の手と会話を止める。

「ベルって、あのlevel9の?」

「うん」

ティオナの言葉に私は肯定すると、皆は真剣な顔つきをする。

「アイズ、彼は今どこにいるんだい？」

「あそこ。」

フィンにベルのいる場所を聞かれて私はカウンター席を指さす。

そこにはベルがお酒を静かに飲んでいた。

「それじゃあ、僕は話をしてくるよ。」

そうやってフィンは椅子から立ち上がると、ベルの所に向かおうとしている。

「フィン、私も行く。」

『アイズ?!』

私がベルの所に行きたいと言うと、なぜか皆が驚く。

「分かった、アイズがいれば少しは警戒をしないでもらえるかもしれないしね。」

フィンの言葉に皆は口を閉じる。

「行こうか、アイズ。」

「うん。」

フィンの言葉に対して私は早足でベルの元へと向かった。

「アイズってばベル・クラネルの事相当気になるみたいね。」

「そうだね、私もアイズがあんな事言うとは思ってなかったよ。」

「アイズさん…。」

「チツ。」

フィンとアイズがベルの所に行くと、他の団員達は思い思いに発言をする。

「まあ、どんな奴かは話して見て分かるやろ。」

主神^{ロキ}の言葉で全員が静かになる。

すると、フィンとアイズと共に件の中心人物であるベル・クラネルがやって来る。

「初めまして、【ヘステイア・ファミリア】に所属しているベル・クラネルと申します。以後、お見知りおきを。」

ベルがそう言うと、皆が歓迎ムードになるけどベートさんとレ
フィーヤとロキだけはそんな感じじゃなかった。

何でだろう？

私がそう考えていると、ベルにガレスが話しかけていた。

「お前さんの持っている酒はドワーフの火酒じゃな、飲んでも何とも
無いのか？」

ガレスの言葉に対して、ベルはこう言った。

「すまない、俺は今日初めてこの酒を飲んだからよく分からないんだ
が、どういう事なんだ？」

それを聞いたガレスや周りの連中の視線がベルに集まっていく。

「??」

それに対して疑問が尽きないベルに対してガレスがこう言った。

「その酒は非情に度数がきつくてのう、ドワーフにしか飲めない代物
なんじゃ。」

「そうだったのか、辛口の酒ではあるからきついとは思っていたが
…。」

ベルはガレスの話聞きながら火酒を瓶ごと飲み干していくの
だった。

その様子を見ていたガレスは大声で笑いながらこう言ってくる。

「ガハハハハハツ!!よし、ベルよ、飲み比べと行こうではないか!!」

飲み比べの勝負を仕掛けてくるガレスに対してベルはこう答えた。

「いいぜ、勝負だ!!」

ベルが勝負を受理したのに対してロキがこう言ってくる。

「ヨッシャ、それやったらウチも参加すんで!!勝者はベル・クラネルに
質問攻め出来る権利や!!」

私は目を見開いた、それは飲み比べの勝者にはベルへの質問攻めが
出来るという事。

「…!! 私もやる。」

ロキの一言に対して私が参加の意を示すと、その一言にロキ・ファ
ミリア全員が静まった。

「自業自得じゃねえか!!」

すると、いきなり大声でツツコミを入れていた。飲み比べが始まって私は慣れない酒にも関わらずグビグビと飲み干していく。

だけど、ベルも負ける気は毛頭なく火酒の瓶を次々と空にしていく。

そうやって飲み比べを始めて三十分が過ぎた頃、ロキや参加していたロキ・ファミアアの団員達も酔い潰れてしまった。

私とガレス、ベルが未だに飲み比べを続けている。

「タハツ、五十本目!!」

ベルはそう言っただけで空になった酒瓶をテーブルの上にへと置く。

そこで、私の限界が来てしまった。

「もう…無理…。」

「大丈夫ですか、アイズさん!?!」

素晴らしいながらレフイーヤが背中を撫でてくれる。

「ありがとう、…レフイーヤ。」

「い、いえ、これくらい大丈夫ですよ!!」

私とレフイーヤがそう話していると、飲み比べの結果が出た。

ベルとガレスが五十本、私が十五本と言う結果だった。

負けた、これじゃあベルに質問できない…。

私がそう落ち込んでいると、ティオナがこう言ってくる。

「ねえ、アイズ。ベルも相当酔ってるみたいだからもしかしたらうっかり喋るかもよ。」

『!!』

ティオナの言葉を聞いて私はその手があったかと思っただけで、すでに限界を迎えてしまった為、行動に移すには叶わなかった。

すると、ティオナがこう言ってくる。

「アイズ、私もベルの強さが気になるからさ、聞いてみるよ。」

ティオナはそう言っただけでベルの方に向かって行くのだった。

私はレフイーヤに肩を借りてホームにへと戻っていく。

翌日の朝、私は慣れないお酒を飲んで二日酔いになってベッドに寝込んで襲い掛かる頭痛と戦っている。

「アイズ、大丈夫?」

そう言いながらティオナが私の部屋に入ってくる。

「大丈夫じゃない。」

そう返事を返す私に対してティオナはこう言ってくる。

「まあ、あれだけ飲めばそうなるよね。」

私はその言葉に対して反論することは出来なかった。

「それでね、アイズ昨日ベルを送って行っただけけど…」

!! ティオナのその言葉に私はベッドから飛び起きる。

「~~~~~!!」

飛び起きたと同時に激痛が走り、頭を抱えてる。

「無茶しちゃダメだよ、アイズ。」

ティオナはそう言って私を支えてベッドに寝かせてくれた。

「ありがとう、ティオナ。それで…」

私はお礼を言った後、ベルの事を聞こうとする。

「ああ、ベルの事だよ。」

ティオナは私が聞きたいことを察して話を始めてくれる。

「どうやったらそんなに強くなれるのか聞いたんだけどさ、『自分で考えろ』って言われたんだ。」

私と言った事と同じだ、そう思っているとティオナが興奮気味にこう言ってくる。

「でもね、ベルが言ってたんだ。自分がここまで強くなれたのはある人達に憧れてたからだだったんだって!!」

「ある人達って?」

ティオナの言葉に私はそう返答すると、こう言ってくる。

「うん、ベルにとっては英雄なんだって!!」

英雄…、ベルにも英雄がいるんだ。

「アイズ、残念だが私はお前の英雄にはなれない。何故ならもうお前のお母さんがいるからね。」

「お父さん、お母さん。」

そう考えていると、テイオナがこう言ってくる。

「アイズ、あんまり焦っちゃダメだよ。アイズにはアイズのペースがあるんだから。」

「うん。」

私は早くこの二日酔いを直してダンジョンに行こうと思った。

顔合わせと神会

「ロキ・ファミリア」との酒宴から翌日、俺はこの日だけはダンジョンには行かない事を決めて本拠ホームにてのんびりと過ごしている。

そこにヘステイア様が美青年の男神一人と犬シアンスロープ人の女性を連れてきた。

「ベル君、紹介したい神がいるんだ!!」

そう言つて来るヘステイア様に対して俺はこう言った。

「ヘステイア様、もしかしくなくてもそちらにいらつしやる男神の方とシアンスロープの女性の事でしょうか?」

「そうだよ。」

俺の問いかけをヘステイア様が肯定すると、男神は自己紹介をしてくる。

「初めましてだな、ベル・クラネル。私の名前はミアハ、商業系ファミリア【ミアハ・ファミリア】の主神だ。」

「私はナーザ・エリスイス、……よろしくね。」

「ヘステイア・ファミリア」所属のベル・クラネルです、こちらこそよろしく願います。」

ミアハ様達の自己紹介の後、俺も自己紹介をする。

そして、疑問に思ったことを口にする。

「商業ファミリアって事はアレですね。」

俺がそう言うと、ミアハ様は笑みを浮かべながらこう言った。

「そうだな、アレが目的だ。」

俺達の会話の内容に対して疑問に思っているのはヘステイア様だけで、ナーザさんはこの会話の真意を見抜いている。

「えっと、ベル君さつきから何の話をしているんだい?」

自分だけが除け者にされるのが嫌になったのか、ヘステイア様がそう問いかけてくる。

それに対して俺はこう言った。

「簡単な話ですよ、ヘステイア様。俺に【ミアハ・ファミリア】の顧客になつてほしいって事です。」

「なるほど、そう言う事か!!」

俺がそう伝えると理解をしたヘステイア様は笑顔でこう言った。

「ミアハには何度も世話してもらった事があるからね、それくらい訳ないよ。」

「ヘステイア様、ミアハ様にも世話かけたことがあるんですか…。」

ヘステイア様の発言にほとんど呆れながらそう言う俺。

「ち、違うんだ、ベル君!!これには深い事情があつて…!!」

それを聞いたヘステイア様が慌てて訂正するために言つて来るが、それはスルーしてミアハ様に話しかける。

「ミアハ様、ナーザさん、俺なんかでよければ顧客になりますよ。」

俺の言葉を聞いてミアハ様とナーザさんは笑みを浮かべてこう言つて来る。

「そちらからそう言つてくれるとは嬉しいな。」

「うん、嬉しい。」

こうして、俺は「ミアハ・ファミリア」の顧客になるのだった。

【ミアハ・ファミリア】との顔合わせを終えた俺は街にへとブラリと出歩いていると、ある張り紙を見つけた。

「ああ、怪物祭か。」

そう、張り紙に書かれている内容は三日後に行われるモンスターフィリアの事だった。

神フレイヤが俺を戯れるためにモンスターを逃がし、ベル・クラネルが神のナイフでシルバーバックを倒す日だ。

そして、今日はガネーシャ・ファミリアの本拠で神の宴が開かれることになっている。

俺は張り紙から視線を外し、ある場所に向かった。

その日の夜、ヘステイア様はガネーシャ・ファミリアの宴に参加しに行った。

「ヘステイア様、喜んでくれるかな?」

そう呟きながら俺は夕食の買ってきたサンドウィッチを食べるの

だった。

夜空に月が浮かびこの迷宮都市オラリオを照らしている。

『本日はよく集まってくれたな皆の者！ 俺がガネーシヤである！

さて、積もる話もあるが今年も例年通り三日後には怪物祭モンスター
フィリアが行われるっ！ 皆のファミリアにもどうか………』

今回の主催者であるガネーシヤが神会デラトウスの挨拶をする中、僕はいつもの服装に上着を着ただけの格好をして、パツクにテーブルに並べられている日持ちしそうな料理を食べながら入れていく。

「あんだ、あの頃から何にも変わらないわね。」

「!!」

突然、背後から声をかけられたことに驚き、喉を詰まらせるが、水を飲んで流し込んだ。

「へファイストス！」

後ろを振り向くと、僕が天界にいるときから神友である鍛冶神へファイストスがいた。

「まあ、元気そうで何よりだわ。ヘスティア、ファミリアを持つ事になったんだからちゃんとした振る舞いをしなきゃダメよ。」

「それくらいは僕だつて分かってるさ。でも、こればかりは仕方ないじゃないか、僕の所は零細ファミリアなんだからさ。」

「そうは言っても主神であるアンタがそんなじゃダメでしょ。」

「ウグツ！」

へファイストスの指摘に僕はうめき声をあげてしまう。

「ねえ、二人だけで話さないで頂戴。一所に会場を回りましようって言ったでしょ。」

そう言つてへファイストスの隣から現れたのはオラリオ最強の一

角である「フレイヤ・ファミリア」主神フレイヤだった。

「ゲツ、フレイヤなんでここに?」

「さつき会場の入り口で偶然出会ったの、それで一緒に会場を回ろうってことになったの。」

へファイストスが軽いノリでそう言っ

て己の苦手とするフレイヤが目の前に居るだけでなく、その美貌に目を奪われた男神達が視線を集中しているから鬱陶しいことこの上無いとばかりに僕は顔を顰めてしまう。

そんな中、「ガネーシャ・ファミリア」の団員が僕達の元へとやってきた。

「神へスティア、眷属の方から御届け物です。」

「ベル君から?」

その団員は僕に届け物である箱を差し出しながらそう言っ

てきて、僕はその箱を受け取る。

それを確認した団員はお辞儀をした後、この場から離れていく。

「一体何かしら、開けてみたら?」

「うん、そうだね。」

へファイストスに言われて箱を開けると、そこに入っていたのは蒼を基調とした清涼感溢れるドレスだった。

「まあ、綺麗ね。」

「そうね、へスティアさっそく着てみたらどう?」

へファイストスとフレイヤもこのドレスを見て賞賛してくれる。

「そ、そうだね。それじゃあ今から着てくるよ。」

僕は二人にそう言っ

てドレスにへと着替えに行っ

た「おい! ファイターん、フレイヤー、ひっさしぶり!!」

「あら、ロキじゃない。一カ月ぶりね。」

「私は何時振りかしら?」

黒いドレスを着たロキの登場に二人は平然とした対応する。

「あれ、ドチビが居れへんな。この宴に来るっちゅーんはガセやったんか?」

ロキはそう言いながら周囲に目を向けるが、目的の人物が目に入っ

てこない。

すると、うおーっという男神達の雄たけびの上がる方向を見ると、そこには愛する眷属が用意した蒼いドレスを身に纏ったヘステイアがいた。

「なんや、貧乏チビを笑いに来たのに、そのドレスはなんやねん!」

「ゲツ、ロキ!」

ヘステイアはいつものまにかいたロキに対して驚く。

「で、僕に何か用だったのかい?」

ヘステイアは何時もの喧嘩腰を控えようとする、喧嘩をしてせつかくベルの用意してくれたドレスを汚したくないからだ。

「おっと、そうやった。ドチビ、お前んとこの眷属何モンやねん。初めてのステイタス更新でlevel9なんて高レベル出せるわけないやろが。」

ロキは冷静かつ冷たい目をしながらそう問いかける、その問いかけの答えを聞くために他の神々もヘステイアに耳を傾ける。

「本当の事さ、僕が最初に恩恵を刻んだのが数日前の事だからね。」

『!』

ヘステイアの言葉に神々は驚きを隠せなかった。

神々は嘘を見抜く力を所有している、それは嘘をついたとしても無意味だという事。

だが、その神々が驚きの表情をしているという事はヘステイアの言っていることは紛れもない事実であることを物語っている。

それに対して、ロキの反応は眉間に皺を寄せながらヘステイアを見てこう言った。

「何処で拾ってきたんや、ベルとかっちゅー子供。」

「拾ったんじゃない、やって来てくれたんだ。僕がじゃがまるくんのバイトしている最中に「眷属にしてほしい」ってね。」

『!』

ヘステイアの言葉に周りにいた神々はまたも騒ぎ出す。

それもそのハズ、一部を除いて【フレイヤ・ファミリア】【ロキ・ファミリア】といった第一級冒険者が多く所属しているファミリアを差し

置いて発足したばかりの零細ファミリアにオラリオ最強と呼べる
eve19が誕生したのだから。

しかも、それまでもが嘘でないと断言しているのだからたちが悪い。
それを聞いたロキは口を開く。

「なら、最後の質問や。」

「…なんだい？」

「神アルカナムの力使ってへんやろうな？」

「ああ、使ってないよ。男神ゼウスの名に誓ってもね。」

その会話の中で二人の女神を視線を逸らすことなく見続けている。
最初に視線を外したのはロキの方だった。

「それならええわ、ウチの用事はそれだけやさかい、帰るわ。」

手をヒラヒラと振りながらロキは会場を去って行った。

「なんだったんだい、アレは…?」

ヘステイアはジト目でロキの歩いて行った方に目を向けていると、
フレイヤがこう言うてくる。

「ごめんなさい、私もこれで失礼するわ。」

フレイヤもそう言うてすぐに会場を後にする。

「何だったんだろうね、ヘファイストス。」

「そうね。でも、これからは気を付けた方がいいわよ、ヘステイア。」

「え?」

「アンタんとこの眷属子供が狙われてるかもしれないわよ。」

「どういう事だい、それは!？」

ヘファイストスの言葉に対して驚きを隠せずに大声を上げるヘス
テイア。

「だって、そうでしょ。最初の内から第一級冒険者の実力を持ってい
る子供がいるなら娯楽に飢えている神々ならちよっかいをかけるに
決まっているわ。」

ヘファイストスの言葉にヘステイアは急いで自分の帰りを待つて
いるベルの元にへと走って帰る。

「ベル君!!」

勢いよく地下室の扉を開くと、そこには筋トレをしているベルがい

た。

「お帰りなさい、ヘステイア様。」

自分に向かつて投げかけてくるベルの言葉に、ヘステイアは涙を浮かべながら抱き着く。

「どうしたんですか、ヘステイア様？」

ベルはそんなヘステイアを優しく受け止め、涙を浮かべるその理由を問いかける。

「実は…。」

ヘステイアは今までであったことをすべて話し、ベルに問いかける。

「ベル君は僕の前からいなくならないよね？」

そう言ってくるヘステイアに対してベルは笑みを浮かべながらこう言った。

「勿論ですよ、俺は生涯〔ヘステイア・ファミリア〕のベル・クラネルです。」

「そうか、よかったあ〜。」

ベルの言葉を聞き、ヘステイアは安心したため眠ってしまった。

その姿を見届けたベルはヘステイアと共にベッドで眠るのだった。